

『砂漠の国の柔道場』 『第三話』 柔道場風景さまざま

岡本文夫 （元アラビア石油、元国務大臣政策担当秘書）



大人の部の弟子たちの主要メンバーと



子供の部のウォーミングアップ。筆者の右隣は唯一の日本人弟子・6歳の英一郎

道場での稽古手順は全て滋賀大学柔道部時代のやり方を踏襲して満足していたのだが、社会慣習の相違から戸惑う弟子たちが多かった。また、道場内での指導用語は全て日本語で徹底した。少年の部と子供の部の弟子たちは全て素直に従うのだが、固定観念が身に付いている大人たちには、かなり受け入れがたいものがあったようだ。稽古の始まりと終わりには、一列になった弟子たちと師範が互いに座礼をする。

その時、大人の弟子たちの座高がやけに高いのだ。後ろに回って確認したら、彼らは日本式の足首を伸ばして親指を重ねた正座が出来ない。イスラームの礼拝は、足首を伸ばさず足の指を立てて正座に似た体勢を取るから、それが身についてしまっている。

また、大人の弟子が最も抵抗を感じたのは、稽古の終わりに一列の弟子たちの先任者の発声で「Mokusou! (黙想)」 「Mokusou Yame! (黙想やめ)」 「Sensei ni Rei! (先生に礼)」と締めくくるのだが、みんながちゃんと従っているかどうか薄目を開けて確かめると、弟子の半分くらいはカッと目を開いて筆者を睨んでいる。勿論、これは柔道修行上の礼法であって、指導者と弟子のお互いの深い信頼と感謝を現わす。決して宗教的意味合いを持つものではないと説明をしてあるのだが、『集団で礼をする方向に、何でお前が座ってるんだ』という違和感を捨てられない者は結局長続きしなかった。

稽古開始の定刻になるまでは、集まった少年や子供たちは 40 畳の道場で遊びまわって、その賑やかなこと。その中で、彼らのあるふざけパターンに気が付いた。

仲間の体や頭を突き飛ばしたりつついたりして。「カモーン！」と笑い合っていた。アラビア語ならその意味が解らないし、英語で **come on!** と言っているなら、その動作と言葉がかみ合わない。しばらく観察してその意味を理解して、一層彼等を可愛く感じた。これは筆者の物真似をしてふざけているに違いない。

特に大人の弟子を鍛える場合に、気弱になって逃げに回るようなときに、筆者は愛情を以って「バーッ、カモーン! (馬鹿もん)」と言って励ますのだが (決してイジメ発言ではない)、少年たちの耳には、ワン・ワードの下半分だけがインプットされたのだろう。

道場の中では、筆者は弟子たちに「You need to call me as “Sensei” (先生と呼びなさい)」と教えていた。彼らは素直に筆者を「Sensei!」「Sensei!」と呼んでくれており、こちらは師範に対する敬意を感じて満足していた。

ところが、ある日のこと。その呼称が必ずしもこちらの満足とは一致しないことに気が付いた。

青年弟子のひとりが、結婚式の招待状を届けてくれた。光栄ではないか。勿論、喜んで出席させて貰うのだが、封筒の宛名を読んで大笑いしてしまった。そこには、下手なローマ字で、『**Mr. Sensei Okamoto**』と大書してあった。つまり、「Sensei」と呼ばせて悦に入ってたのは単なる誤解であって、何のことはない、彼らは筆者のファーストネームだと誤解して、「文夫、文夫」と呼び捨てしていたのと同じだと解った。

比較文化論的に見ても、結婚式は興味深い盛大なものだった。なかなかの名門らしく、大きな館の中には女性陣がたくさん集まっているらしく金属カスタネットが刻むリズムと嬌声が聞こえてくる。館の前の砂地の広場には大型テントが5張り。館の中は全く見えない男性陣は砂地に直接敷いた絨毯の上にたむろして賑やかに雑談にふける。司会進行も、祝辞披露もない、ただ集まってアラブコーヒーを飲みながらだべるだけで趣向を凝らしたイベントも何もない。ただひとり参加した日本人として助かったのは、資材部のガージーが頼みもしていないのに、「この方が柔道指導者のミスター・オカモトだ。沢山の若者がお世話になっているんだぞ」と、参加者に触れ回ってくれることだった。初対面のアラブ人たちも敬意を表してくれるし、話題も筆者の得意分野のことだから、下手な英語でも思う存分喋ることが出来た。

やがてサフランで色付けされた焼き飯が盛られた大皿に羊 1 頭の丸焼きが乗せられてカルーフ（羊）パーティが始まった。大皿の周りには片膝を立てて男たちが集まって、右手だけを使って手掴みで肉をむしり盛大に食べ始めた。羊が骨だらけになると、披露宴は終了。各自、油だらけの手と口の中を石鹸で洗って解散する。

特に親しい仲間たちが騎馬戦の馬のように花婿を乗せて花嫁が待つ館へと送り込む。館の厚い鉄の扉がガチャン閉められると、三々五々来客は帰途についた。

大変ユーモラスに観察したのは、花婿を担ぎ上げた仲間たちの掛け声だった。

「ヤッラ (let's go) ○○○！」「ヤッラ (let's go) ○○○！」とのはやし立てに対して、花婿は「イヤア！ハハハ」と照れっぱなしだった。○○○の部分のアラビア語はさっぱり解らないのだが、花婿の照れぶりから見て、多分性的表現だったのではないかと推察した。

さて、その親愛なるガージーくん。熱心な稽古の見学者なので、教えてやるから入門せよと誘っても、「いえいえ、私はミスター・オカモトの指導ぶりを拝見しているだけで楽しいです」。一種のファンであり、勝手連のマネージャー的存在として道場運営に関わっていたらしい。仕事で資材部の前を通る時など、たむろする同僚たちに、「ほらほら。見ろ見ろ、あれが柔道指導者のミスター・オカモトだ」とふれているから、筆者に敬意と興味溢れる視線が集まって、気分は悪くない。

筆者と親しいことを仲間内で触れ回することでステイタスを感じていると観察された。

「ナニ、お前。柔道を習いたいのか。それじゃあ、俺からミスター岡本にお願いしてやろうじゃないか」という具合である。事実、大人の部に何人もの入門者を連れて来て、道場の隆盛に貢献してくれた。

その中に、少々変わった男がひとりいた。執務中の小生のデスクにガージーが連れてきた男とは充分面識があった。

相手も驚いた。「柔道指導者って、アンタのことだったんですか！」

田舎町のカフジでの生活用品の買い物が出来るのは、会社が運営する生活協同組合と街にある埃だらけの倉庫もどきの 2 軒のスーパーマーケットだけだった。入門希望者はその内のひとつ。通称『コトブの店』のマネージャーのイラン人・サファルだっ

た。

入荷のある毎週木曜日の朝、買い物客は開店前に列をなす。遅く行くと野菜類などはしおれた葉っぱしか残っていないからだ。

「何歳だ、お前？」「多分、48 歳くらいだと思います」（この年代だと、正確な生年月日を知らない者の方が多い）「そりゃあ、too late だなあ。やめといた方がいいぞ」

「ミスター。俺は腕相撲では誰にも負けたことはない！なんだったら、ここでアンタとやってもよい！」。なるほど、背丈こそ筆者より低い、分厚い胸に太い腕。確かに強そうだ。ガージーの顔を立てる意味もあって、長持ちするかどうか解らないが、入門を許すことにした。

数多くの弟子たちの中で、サファルの稽古ぶりは光っていた。筆者への闘志丸出しの本気ぶりに好感が持てた。優しい筆者は、三本に一本は、投げ技のパターンを体得させてインセンティブを与えるために、きれいに飛んでやるのだが、それをするとサファルは抗議した。「Sensei、そんな筈がない。真面目にやってくれ！」

寝技で絞め技に入ると、顔を真っ赤にしながら『ヒーヒー！ゼーゼー！』と必死に耐えて、絶対にマイッタをしない。日本人相手ならば落としてしまっても問題にならないが、彼の地ではどんなトラブルになるか解らない。限界を悟ってやったら、技を解くに越したことはなかった。

指導料など一切取らない事に対して、週一回の買い物の際、サファルなりに気を遣ってくれた。入店すると、アイスクリームの袋を破って、「はい。マダム。はい、お坊ちゃん」とサービス。日本人女性がアイスをしやぶりながら買い物する訳にはいかなから、これは一回でやめさせた。一週間分の買い物の山とともにレジに向かうと、そこには必ずサファルが交代していた。「はい、キューカンバー、ノス（半）キロ」。これはレジを打つ。「はい、バナナ、ワハド（1）キロ」。これはレジを打たない。つまり、この調子でまともな勘定を請求しないのだ。筆者の後ろにはレジ待ちの行列が並んでいるから、気が気ではない。

「オイ！サファル、真面目にやれ。ちゃんと勘定は払うから！」「Oh! No Problem」。

稽古への出席率が良いサファルとの麗しい子弟関係はいつまでも続くかと思われた。しかし、思いがけない情報提供があって、良好な関係は破綻してしまった。

日本人従業員が自治運営する日本人食堂には、三井商船大阪から 2 名のコックを 2 年契約で派遣して貰っていた。鉱業所では年に一度の長期休暇しか取れない規則だから、長期航海に強い人材である船のコックなら来て貰えるからだ。日本人コックも『コトブの店』に仕入れに行くのだが、業務用の大量仕入れだから直接倉庫に行く。

そこで、サファルに襲われたという報告だ。

「ワシ、あんなに驚いたことあらへんで。倉庫でいきなり抱き着かれてまさぐられたんや。聞けば、あの男、柔道教わっとるらしいやないか。気をつけんとアカンで」。そこで、筆者には悟るものがあつた。あのむき出しの闘志。絞め技にも屈しない根性。他の弟子たちには見られない稽古態度を良い方に評価していたのだが。「ヒーヒー、ゼーゼー」と耐えながらも、実は悦楽の境地にいたのではなかろうか。

その日から、筆者は指導態度を改めた。投げ技を打つ時は、受け身を取りやすくするために、着畳の瞬間にクッと引き上げてあげるのが常なのだが、サファルはそのまま叩きつけるようにした。態度の急変にその理由を悟ったサファルが、道場に入出入りすることは絶無となった。

任期を終えて本社帰任が迫った時、筆者は真面目について来た最優秀の弟子に昇段昇級の栄誉を以って報いてやりたかった。道場を通過した弟子の数は 189 名いたとはいうものの、大半は長続きしなかったし、柔道文化の無風地帯では、昇段昇給試験を行える実態が整っている筈もない。柔道信奉者とはいえ、アマチュアの筆者には段位級位の発行権は付与されていない。そこで、国際交流基金経由でクウェイト・ナショナルチームの指導者として派遣されている甲斐光師範に協力をお願いした。筆者の継続的組織的指導に賛同して頂いていた甲斐師範にはご快諾頂いた。その結果、クウェイト人のアリに初段、パレスチナ人のマーヘル、アーデル両君に 1 級（茶帯）の正式免許を与えることが出来た。ただし、日本へ連れて行って試験を受けさせたら、アリは弐段、マーヘル、アーデル両君は初段を取る実力にまで育っていた。

カフジでの最後の稽古の後、帰任の時が来たと告げた時、弟子たちの反応が本当に可愛かった。一列に座っていた彼らが一斉に立ち上がって跳ね回って騒ぎ立てた。

「反対だ！反対だ！」「そうだ、署名運動して帰任を止めさせよう！」

典型的なアラブ流の大げさな愛情表現ではないか。

「お前ら、もう一度座れ！あんまり、俺を困らせるな。会社命令には従うだけだ」。

しぶしぶ納得した弟子たちは、会社のパーティホールを借り切って盛大な歓送会を開催してくれた。大人は大人なりに、少年は少年なりに、気持ちを現わすプレゼントを準備してくれたが、一番印象的だったのが貴賓用ガウン一式だった。日本では着る機会などあるとは考えられなかったが、感謝の意を表すために、その場で着用して弟子たちと一緒に記念撮影したのは当然のことだった。



弟子の結婚式のカルフ（羊）パーティに招待されて



本社帰任歓送会での贈り物の貴賓ガウンを纏って



おかもと・ふみお

1947年生まれ。アラビア石油勤務を経て、元国務大臣・村田古隆衆院議員の政策担当秘書を務めた。2013年「小説湾岸戦争 男達の叙事詩」（財界研究所刊）を伊吹正彦のペンネームで出版。講道館柔道五段（クウェート国柔道連盟七段）。

To be continued